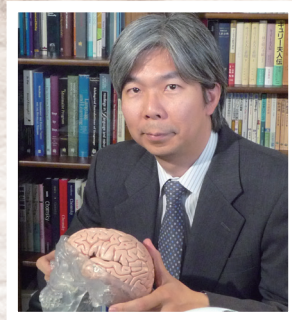


» 先生方のおすすめ書籍

酒井 邦嘉 Kuniyoshi SAKAI

1964年生まれ。東京大学理学部卒、同大学院理学系研究科修士・博士課程修了。理学博士。同医学部第一生理学教室助手、マサチューセッツ工科大学客員研究員、東京大学大学院総合文化研究科助教授、准教授を経て、2012年より教授。日本学術会議連携会員、中央教育審議会専門委員。専門は言語脳科学と脳機能イメージング。著書に『言語の脳科学』『科学者という仕事』『科学という考え方』（中公新書）、『脳の言語地図』（明治書院）、『脳を創る読書』『考える教室』（実業之日本社）、『高校数学でわかるアインシュタイン』（東京大学出版会）など。



本号は全体として脳や芸術に関係する予定だと伺って、最近まとめた『芸術を創る脳』（東京大学出版会、2013年）が頭に浮かんだ。この本の各章で、対談をお願いした方々の著書と関連書を紹介した。ここではその後に出版され、入門者から読めるおすすめの本を1冊ずつ紹介したい。



▶ 聴きたい曲が見つかる! クラシック入門

○曾我大介(著) 技術評論社 2016年

クラシック音楽のわかりやすい入門書。作曲の背景や作曲家の人間臭い側面が次々と語られ、曾我さんの博識が横溢している。その日のムードやシーンに合わせて聴きたい曲を選ぶという発想で、楽曲のイメージが豊かに膨らむのが楽しい。お気に入りのステレオでじっくり聴くのもよし、気軽にBGMにするのもよし。定番のクラシック曲からあまり知られていない曲まで、音楽の多様性と楽しさが味わえる。本にはCDも付属するが、180ものクラシック曲がQRコードでオンライン試聴できるようになっている。音楽に関連した教養と蘊蓄が身につくのはもちろん、「この曲に出会えてよかった」と思えるような、新たな発見と体験が待っていることだろう。



▶ 羽生善治の将棋入門 ジュニア版

○羽生善治(著) 河出書房新社 2015年

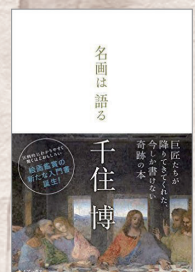
わかりやすい将棋入門書の金字塔。2002年に出版された同タイトルの5巻シリーズの合本だが、元から「ジュニア版」として平易な言葉で書かれている。将棋をある程度知っている人にとっても十分に高度な内容が書き込まれていて、しっかりマスターすればアマチュア有段者の棋力が十分身につくだろう。とりわけ読者に語りかける文章が素晴らしい。最後の巻「考えることを楽しもう」には、羽生さんが少年時代に「ひとつの図面、ひとつの局面を、あきもせず、何時間も考えていました」とある。自分で納得するまで考え続けるということは、学問や芸術における本当の奥義であろう。東京大学では、囲碁や将棋の講義がある。棋道と学芸は遠くないのだ。



▶ 前田知洋の女性のためのマジックレッスン

○前田知洋・角矢幸繁(著) 東京堂出版 2014年

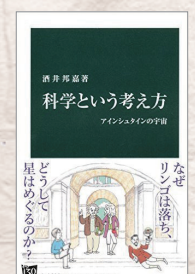
マジックのハイセンスな入門書。タイトルにある「女性のためのマジック」とは、「女性が演じるマジック」だけを意味しない。「(男性が演じて) 女性に見せるマジック」ということでもある。トランプ一組の枚数に合わせた52のマジックが、「道具&準備」と「演技」に分けて明快に語られる。前田さんの新たなアイデアと演出によって、クローズアップマジック(観客の目の前で演じる奇術)の古典が現代に蘇る。まさに「復活のマジック」の連続技なのだ。現象が単純であるほど、観ている人の驚きは大きく直接的になるものだ。演技を見てまねるのではなく、文章と写真から所作をイメージすることこそが、前田流マジックレッスンの真骨頂である。



▶ 名画は語る

○千住博(著) キノブックス 2015年

西洋美術史を代表する名画45点を挙げて、画家の視点からその真実を読み解く。絵画に込められた美意識を読者と共有しようとするのが新機軸。絵画鑑賞の魅力は、「歴史的な芸術作品から得る人間という混沌とした存在を知る手掛かりとしての面白さ」にあるという。画家は、どんな「抑えきれない衝動」を覚え、何に夢中になってその絵を描き、何を伝えようとしたのか。作品によっては画家自身やその周りの人が、ときには子供までもが千住さんに憑依して雄弁に語り始める。そうした豊かな想像と空想のお陰で、それぞれの名画に秘められた謎が次々と明らかになるという仕掛け。動機・機会・手段は推理小説の3本柱であり、読者を謎解きに誘う。



▶ 科学という考え方

○酒井邦嘉(著) 中公新書 2016年

科学は人間が創ったものである。私は中学生の頃から、自然現象だけでなく科学者にも興味があった。究極はアインシュタインで、伝記や解説書を読み漁り、大学時代は相対論の原著を読むのが無上の楽しみだった。相対論に関する本は星の数ほどあって、一般書では数式をできるだけ省くのが慣例だが、数式なしで深い理解に至るのは難しい。そこで一計を案じて、発展編を『高校数学でわかるアインシュタイン』として独立させ、本書では「科学という考え方」の熟成過程や歴史的な背景を主にまとめることにした。自然法則の意味を深く掘り下げていくと、人間が目に見えないものをどのように探してきたかがわかる。その歩みは芸術にも通じるだろう。